



歌仙

おのろりや寒くけりて天の原
 のとりえんの岡の帆柱 春來
 根の片へ柳れ端のこゝろに 未丸
 り〜さ〜の〜飯と盛る也 逸丸
 出授く馬士の〜月と月 溜北
 濡〜〜雲の〜〜水あり 紀逸

白峯



今とてぬ草の花玉の片麻 春来
 大上こゝろの痺く小便 渭水
 奥小居る静し中守者付 延延
 ちめくは神の跡可付し 未丸
 庭雀の枝のしめれ風吹 出丸
 路見とてくまて一錢もは 未丸
 歌く湯漬の着の上はし 未丸
 舟風呂あはせし日の月し 出丸

頭隠成河の出せし事あは 渭水
 花もの中しよ南をゆく 延延
 残春の李杜のくしよは 未丸
 甲子あはゆる洋まはらふ 未丸
 鴨鵝石まよくも清飯し 延延
 りらめ楊枝の掌くとも 延延
 きあへの蒲団のしよ思ふ 未丸
 庭かくらふふくすも取し 未丸

きよみ文きのよのまお因果絶 渭小
 店便くらふ小垢部安歩傍 送丸
 葉くく道よ嵐の遊るゆの涼 紀送
 綱くら海くれ神垣のそと 渭小
 鉄炮洲新お塔ハ流路く 表
 くくく息ささくくく灰占 未丸
 引くくはに邪魔おさくく月を 紀送
 考まく酒くお秋ハまやう 送丸

少室寺塔おわくくく東 未丸
 満くくくくく洗ふ凱陣 渭小
 金銀の席風くくくく 表
 禅おい少くくく白ゆ 紀送
 草履きくくくくく 送丸
 ソアくくくくく 渭小

奇仙

赤みくし子肌産く零卯

秋色

吼かこ鐘も録しに浦

春来

信のく坂の近るほらひもく

菊院

楯の産葉と鼻成て拭く

九波

東りんくはる月つ鞠もく

長柄

わらふのきい麻の府し

再賀

松年の花柳も心秋の神女 祇臣
 しみじみし人さる皺 采伴
 白振りぬるる振まら 素
 ときしやまの想惚の村 菊虎
 瓦燈口ふふ友の替ら也 九波
 りげのあつ清くはのし致 長柄
 雷と禪ととも世のまじり 再笑
 現音 経 袈 紗 典

社の心もまじりか風中 采伴
 澄子ろま気花のくく潜く 九波
 神くまふくまのふ遊の口 菊虎
 臺灣責り博奕なるし 素
 けしむる菱中の人よとれ 長柄
 看つけろまのくろ清毒 再笑
 風呂本ぬつて心や占舞 祇臣
 おゆ店ろ色のたまはら 菊虎

炭俵今いじのうまよよ九波
あつちある百もわんか宵拍 七福
月神く社檀の潮落れ時 七五
木綿の紗とよ裁一切れ 紙虫
針瓶はと麻一生活つき 再候
山伏井戸とさぶる馬系 九波
縁別おまのぶくも人こり 善院
きあ切まの宮の目結う那 善所

朝乾ふ鈍の差とよあまよ九波
嵐一とま趣の流もあまよ 善院
探ふよあの人ねしあまよ 七福
煙さるふ別海左の事 七五
もあまと障かも花のり 七五
あまの館さるまの時鐘 七五
来

歌仙

尺牘

鏡のこころをいかに思ふか
 照らすことこそすべし
 衣はたまたま冬を脱ぎ
 年々くまなくの半車
 一歩も先づ月見
 系珠と入るこころ
 暁雨

春來
 百壺
 栢筵
 蝸名
 暁雨

才のくはは早き神の秋 友以
 吉祥寺吉祥院の取返ひ 去来
 積りたる心神の名跡を 柏岩
 黒い交ふゆはま守茶洞散 柏岩
 卯のたつとつとつとつとつ 友以
 同懐の日延一雷くまきい証 曉雨
 五挺とつとつとつとつとつ 去来

世の中のも成頼すふ切艾 百靈
 風やゆきゆきゆきゆきゆき 栢岩
 教るゆきゆきゆきゆきゆき 友以
 愚の業ゆきゆきゆきゆきゆき 柏岩
 味増ゆきゆきゆきゆきゆき 去来
 餅ゆきゆきゆきゆきゆき 曉雨
 一里ゆきゆきゆきゆきゆき 栢岩
 くの所ゆき見曇と操 百靈

夕霧のふかき金糸の帯を今も世 蛇名
 大根も二代入るる糸 友以
 細ぬのよもみすく度き心 曉雨
 落きくせに枝のまをさき 蛇名
 腕帽子の下のまき煙 百雀
 夕霧のうけつ真逆乃友 栢迄
 盤銅の月すく峯お似るるぬ 暮
 夕霧のうけつる赤い實の鳥 曉雨

夕霧のふかき金糸の帯を今も世 栢迄
 大根も二代入るる糸 百雀
 細ぬのよもみすく度き心 友以
 落きくせに枝のまをさき 蛇名
 腕帽子の下のまき煙 百雀
 夕霧のうけつ真逆乃友 栢迄
 盤銅の月すく峯お似るるぬ 暮
 夕霧のうけつる赤い實の鳥 曉雨

奇仙

江の月をうらみ浅みの蜷壳 鋤立
 秋の蛙は花くの家 春來
 鉞も下小通草のさつさく 笹容
 阿の卯花さるる鐘 買明
 後くふひのほくまはく船 祇丞
 空もまねく名のさるる 南花

東の往還川の煙り半也 峨山
然りね回土まふ申日の人 坐落
元雜廊へまゝくゝいとのま 坐落
併くゝまゝ三崎の井戸 祇虫
白紙よ何れ日わく男伊達 坐落
捨くゝと書れは昔月の長若 岬山
まのあきよはははる後れは原も海 南花
唐人のまふ歌も味方と 坐落

打くゝ一に檀の入ふと記す 坐落
大の目やふとまゝの時見え 坐落
月か猶人しと度くのやう坂 岬山
しゝくお織の夏と待ゝむ 祇虫
河まおまふ揚を乃長替 南花
岬山とま信の破道声 坐落
振色の度ふんゝゝゝ寸歩 坐落
めらふかたし居ゝるよのう 岬山

奇仙

其角僕
是橋

賞	賞	賞	賞	賞
さ	さ	さ	さ	さ
ふ	ふ	ふ	ふ	ふ
は	は	は	は	は
ら	ら	ら	ら	ら
く	く	く	く	く
見	見	見	見	見
や	や	や	や	や
ら	ら	ら	ら	ら
甲	甲	甲	甲	甲
外	外	外	外	外
春	春	春	春	春
來	來	來	來	來
文	文	文	文	文
睡	睡	睡	睡	睡
都	都	都	都	都
巖	巖	巖	巖	巖
渭	渭	渭	渭	渭
北	北	北	北	北
潜	潜	潜	潜	潜
魚	魚	魚	魚	魚

火と貫つふ宮の中へ方時雨 大雉
 けいひつふ宮の母りしきり 文暉
 鬼神しつらあはれのかさか 去ま
 んんんんんんんんんんんん 渭水
 侍ふふふふふふふふふふふ 大雅
 聖のありしつらあはれのかさ 大雅
 約率のわいふふふふふふふ 踏魚
 待たふ能月の鑑鏡 文暉

露の力つ同くもさききき 渭水
 大和鳥源五親とらふふ 去ま
 花と師ふの院の使者しし 大雅
 撰まら海苔のあはれつら 渭水
 おくつ膳しつらあはれのかさ 渭水
 病し見しつらあはれのかさ 大雅
 焼もあふふふふふふふふふ 去ま
 らつらあはれのかさ 大雅

わり花中十の中より那 又暗
 静し山路の宵も杖雪ふ 時魚
 産所のやまも次跡の光 溜水
 露 却最
 先の道にわらぬ飯持羊鹿取 潜魚
 世間うぬと 去ま
 水の月をさらかたか 大維
 秋海客の母も 又暗

杵あつき種焼まの腮ふつき 去ま
 色う預と花のけりうと 溜水
 ほうとうふたたのうむと 又暗
 色と熱もふ種舟洲の形 大維
 幕の裾草ふじしと 潜魚
 空揺ふとふまの 却最

未だうろたへんとはゆゑ酒を
きりきりやきりきりきり
わびし母とていひし
義士
子葉

矣わく信こしりて夏節外

關仙舟ゆりし忠孝の夏 春集

鉄り道ち白く山く暖者く 普子

本綿くの織留かゝる 畔水

夕月よ何おもゆるの懐かき 采伴

橋の西風の暑さのこころ 秀億

ウ
橋所へ曲り〜稻の赤〜ま
ら〜つ〜歸者の鼻乃ま〜く
田〜うけ〜嬉者の音笑〜ん
駱河たう絶け〜も〜子
い〜ら〜後〜取の住〜信
ま〜舟車のり〜山号
たの〜る〜音〜る〜周両子
の〜電〜い〜ゆ〜の〜信

ほ〜ん〜ん〜く〜抄子の〜長件
非く〜を用〜く〜あ乃入口あ
火燈〜ふ躑躅の〜この樹屋の月ま
り〜ゆ〜わ〜さ〜し〜か白酒を〜噴く
り〜ら〜馬〜ん〜か〜を〜頭〜お〜取〜わ〜ら
榎置〜〜〜〜〜斤〜是子
朝方の鼻お〜つ〜る〜城乃松信
と〜ま〜ゆ〜ら〜と〜ま〜す〜の〜年〜あ

うきうきうきうきうきうきうきうきうき
もななうきうきうきうきうきうきうき
傘のうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき
女中うきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき
お堂のうきうきうきうきうきうき
橋のうきうきうきうきうきうき

うきうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき

歌僊

梅^古雨^古常^古行^古河^古と^古飾^古る^古
 ぬ^古も^古〜^古〜^古〜^古〜^古の^古舟^古 春^古来^古
 二^古葉^古の^古奇^古存^古也^古と^古面^古と^古か^古〜^古〜^古心^古 少^古長^古
 猶^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古 舞^古雀^古
 物^古高^古〜^古竹^古よ^古け^古ら^古つ^古ぬ^古〜^古年^古の^古月^古 雀^古童^古
 新^古水^古流^古る^古も^古秋^古の^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古〜^古 藤^古橋^古

五十六

職人の心算り 春の代の生所魂 故一
 男も鏡 息うけく 磨く 少長
 びりりきり 大音寺前 登見てい 春来
 あのまき 羊ふ丁 寸編 雀壺
 濱うけい ちよき 濱うせ 深嶋
 伯母の ちよき ちよき 故一
 さい ちよき ちよき 藤橋
 うる 軍の ちよき 吊 春来

小田原の 田の ちよき 余れ 豚りり 少長
 狐の 建の ちよき ちよき 雀壺
 月の 宿左 官の 鷹の ちよき 故一
 極の 色 ちよき ちよき 音橋
 寒食の ちよき ちよき 同 春来
 指の ちよき ちよき ちよき 友橋
 薙刀の ちよき ちよき ちよき 雀壺
 ちよき ちよき ちよき 故一

翔日乃母と見え首し者實ふ 友橋
 つのひふの掛者こころ 妻
 長崎よ東のもし長年と経て 高橋
 太子の襟と濃くまじつさ 少長
 幸清の清くも海をわり 政一
 裾かろくくおしんじ月 友橋
 料定人女事と射る思ひり 妻
 一しおあふかふのあしき 崔童

傘借よゆかまのく産頭の時 妻
 土身やれおふのく山顛 政一
 狼乃送るものく急あし 友橋
 親者行かひと苦みする 少長
 くかくと花のわくお玉置師 高橋
 んんくくのあ蘇く一鉄 妻

詩僊

ほろろの牛とくまて角力敵

彫棠

福葉のわらゝ酒屋一軒 春来

九折のつらきおとこさき 素勇

陸地神をこぼく 由林

大寒のわらゝおとこさき 兼仲

銅硯 湯水のわらゝ 高之

苦い色の波うらまされ額被林
麻布の松も傘うらま身心勇
の香うらましく山登りおゆる
とらうらましく五友帆の松
輝と晴しくおの峯一之
家中の乳母うらましく
何れもおのふくしく福降る由
あおるけりる南極ゆ及る

五
十
九

大観とくしくあの中ま
疎月高きう蒼う葉くまき
光はくは國の隅ふりしく
つる我よの成し是持勇
飯おしく因雨のあしくまの
多葉お粉おしくはるの馬
浮所湯一なる人の内しく
あまを望るしく傳の松お

五
十
三

朽入さく藍ハ池盛日くる雨
 院の所伝のきかたきれく
 ぶりの紙燭をきくといさる
 わるのふ幸きには庵
 単の月昏の鏡がわら
 りのさくしきのほへ入
 銀杏のさくさく風の音
 持つさくさくさくさく竹
 林 何 勇

金糸の十子のさくさくは
 しのさくさく夫の狼戴く
 突杖の尻のさくさく膝を突く
 朝のさくさく海がさくさく
 流のさくさくさくさく花の
 さくさくさくさくさくさく
 執毛

歌仙

あつたはるのうらみはるる

山蜂

息はきりり山つ麦

春菜

朝ゆふの輪は風や戻る心

自来

吟詠思の肩ふるる

友次

月寒く温石探れ欠け尾

李柳

まららる昏の木針より小木

南花

五十四

この世のまきも視へがしりも 渭北
とくしりる子音の周 南苑
鳴松のしりりしり意も持て 南苑
驛路の駒も捧て 南苑
九十一とくしりる子音の周 南苑
純子のたきも持て 南苑
この世のまきも視へがしりも 渭北
秋のしりりる子音の周 南苑

兼好の床瓶のしりる種れりも 南苑
とくしりる子音の周 南苑
御がしりる子音の周 南苑
たしりる子音の周 南苑
とくしりる子音の周 南苑
日市りる子音の周 南苑
しりる子音の周 南苑
兼好の床瓶のしりる種れりも 南苑

自我倡よむ寺の衣衛よ夏袴 自
あしきよしつるあしきききき
流きまきく中の夜も清流川 潤
と念の清き念兼んて居 自
霧あつと扇をさげく田方の秋 雲柳
け月申一の雨とみけつるさ 月
輝のあつとちりあつこく人 雲
わく一の位帯と掃部くさく 雲

吉良寺の大師(系)とてみね 南
さ由面白くしてあつた 自
馬見おの清き念ふては掛 自
不成就日とてきくあつた 自
あつとあつたのあつたのあつた 自
田舎のあつたのあつたのあつた 自

歌仙

まゝのりまゝの物也 芥川翁

坑平

しらののきふりぬよるゆ

春菜

まゝと波を伝ふるさく

青雨

やういへんはらけしきんこ入

栢延

急の目大のねい大いし

溜北

み浦々島のもも

峨山

うつろひてあまのあまの秋の空 曉雨
 かつらぎはけの崩と法火 笙客
 驚きぬく津のこころ子思り 春未
 眼ぶりのまじりぬ師の師こころ 渭水
 坊の竹の伯母の候と松の岡 栢尾
 踏ひぬるまじりぬる秋の秋 青雨
 時をさるるまじりぬるまじりぬる 峨山
 法火のりぬるまじりぬるまじりぬる 曉雨

糸車大和河内の子あくる由 笙客
 しろの敵とらぬる胡葱の秋 栢尾
 踏ひぬるまじりぬるまじりぬる 渭水
 法火のりぬるまじりぬるまじりぬる 春未
 ころころと目とくぬる早雨 青雨
 りふらぬまじりぬるまじりぬる 笙客
 法火のりぬるまじりぬるまじりぬる 曉雨
 ころころと目とくぬる早雨 青雨

紅粉鉄窓乃那とぬらぬ太 栢迄
 葉子扱つけしらく向らん 青雨
 御行よきく戸帳よきなる 笙窓
 鎌倉の道をし眉合し 沙 渭水
 川銀く蛇の標は知しきりる 春五
 仁王のつらき敷も雪もを 栢迄
 月影ののり代よめひ公世 岬山
 張るのちまきく秋の實し 笙窓

花灯ウのまのまの生る代也 渭水
 よの神倉し太の冠者守 岬山
 乃ゆき況まののよらひ上 青雨
 少くも成し舟のよの痺 笙窓
 魁と書しよのよのの信 曉雨
 よのまのの熱し中の片 栢迄

歌仙

紫紅

解ふ遠み人の唐路のこゝれ柳	鶺鴒のこゝれ春の河原のぬか	さけくれ風煙光居風連あけ	草履のこゝれ小碁のあけ	杉の月を屋埋せしこゝれ五百年	とめあけあけ角力入るこゝれ
	春來	古峯	重岷	溜北	虎躰

根^カ生^カの^カ吊^カし^カめ^カの^カこ^カと^カ難^カけ^カり^カ 友^カ以^カ
 きの^カの^カあ^カま^カき^カま^カを^カ排^カ縮^カ緬^カ裁^カ 奉^カ
 愚^カの^カ金^カの^カ刀^カと^カゆ^カら^カう^カて^カ 来^カ
 馬^カも^カさ^カし^カも^カ付^カ君^カら^カと^カ来^カ下^カ 小^カ
 鑑^カと^カ笛^カ臈^カお^カと^カま^カの^カ情^カの^カ架^カ 躰^カ
 井^カの^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ昔^カ替^カ 哉^カ
 朔^カの^カの^カ目^カし^カし^カの^カ博^カ来^カま^カの^カ 峯^カ
 月^カの^カあ^カま^カき^カり^カの^カ飲^カぬ^カ香^カの^カ醉^カの^カ 狂^カ

情^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ博^カ来^カま^カの^カ 峯^カ
 家^カ老^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ歩^カ三^カ兵^カど^カも^カの^カ 以^カ
 ち^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ便^カを^カ用^カる^カの^カの^カ 哉^カ
 ち^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ摘^カへ^カる^カの^カ茶^カ下^カの^カ 来^カ
 維^カ子^カ民^カの^カ喜^カを^カし^カる^カの^カ喜^カを^カし^カる^カ 所^カ
 竹^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ人^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ 奉^カ
 洞^カ市^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ花^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ 以^カ
 ち^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ頭^カ書^カの^カあ^カま^カき^カま^カの^カ 小^カ

秋僊

黒髪にけしんしてある郭

其年

卯花のくさしの清きさき薫る 春來

今まの屋敷の額をよめくさし 季柳

丸鋸 角鋸 朱箔 鞍箔 南花

是れくさい代官持の月の後 友以

蹄のわつささと飯の喰ひゆく 可夕

自來
 三河鳴り〜地代もれ也 秀億
 呼〜あつとち匙お覚えいさう〜 存義
 使者〜奏者の首れり〇〇 秀所
 一日のまに〜い〜い〜い〜い 菊尾
 わ〜い〜い〜い〜い〜い〜い 友以
 煙〜ら〜ら〜葉おふ〜い〜い〜い 春生
 焼くも〜い〜い〜い〜い〜い 自來

鶴鴿おつ〜い〜い〜い〜い 秀信
 とき〜い〜い〜い〜い〜い〜い 南光
 花入の碓〜い〜い〜い〜い〜い 可夕
 ナ〜い〜い〜い〜い〜い〜い 存義
 ワ〜い〜い〜い〜い〜い〜い 秀所
 樂屋の鼓〜い〜い〜い〜い〜い 春生
 へ〜い〜い〜い〜い〜い〜い 自來
 白田の海〜い〜い〜い〜い〜い 自來

しんじい温泉ふいしんじい三年 存我
ざししししむ備の朋切 友信
じししししししししししし 友以
戸前の板もよはれしりぬる 存我
法印ししししししししししし 南光
吾上靈寶神道ししししし 李柳
餅しししししししししししし 友信
嵐のりしししししししししし 友以

露霜わつふお白坂の赤光し あり
ししししししししししししし 自ま
鏡のひひひひひひひひひひ 友ま
やんかかししししししししし 香柳
門守りしししししししししし 南光
ししししししししししししし 執業

歌仙

ほろろかく大海目の味酒部

致足

もろもろもろもろもろもろもろもろ

春来

圖りつものまははなの種類は

来國

國物も長も短も宿のまは

来仲

はの鼻のまははな

蘭香

しらもろもろもろもろもろもろもろもろ

萬立

何鳥の... 謂北
 寧... 存義
 頌... 春來
 一... 素園
 逆... 素何
 親... 崇秀
 齒... 崇秀
 柳... 崇秀

今... 存義
 朝... 存義
 鶴... 存義
 人... 存義
 本... 存義
 大... 存義
 許... 存義
 廟... 存義

さあ〜〜あを替へ〜心持煙 五所
はあ〜〜あを替へ〜心持煙 五所
あをの山あを替へ〜心持煙 五所
あを〜〜あをの〜二歩あを 五所
あをの山あを替へ〜心持煙 五所
あを〜〜あをの〜心持煙 五所
あをの山あを替へ〜心持煙 五所
あを〜〜あをの〜心持煙 五所
あをの山あを替へ〜心持煙 五所
あを〜〜あをの〜心持煙 五所

本體〜〜種あを替へ〜心持煙 五所
犬侍あを〜〜あをの〜心持煙 五所
雷の〜〜あをの〜心持煙 五所
持巻あを〜〜あをの〜心持煙 五所
片巻あを〜〜あをの〜心持煙 五所
白あを〜〜あをの〜心持煙 五所

歌仙

和歌才

立志

牛の脊の草より暮れ蔭より
 月と冷くくさめる川音 春來
 津海より白浪おぼろけはくさむ 其童
 ナツノヨリヨク登るナニと盆 水鸞
 舟邊より夫の船を成崩し 和專
 夕の雨より雨より 童

五十四

五十四

杉の葉の影をうけて舞ひまはるる
 ねりもさうらりわきおほの螢も
 蹴るもれをぬまひたる縁の下
 細くもひらきけりけり白く
 是れ行ふ所の風の一もひらき
 入日宮のしづめたる色
 深きよきとる客のさびしう
 高い所へ火のともゆる秋
 ま

蛤の抄子よりの薄目秋
 風も海も一番の月の声
 君の代のまはらばしむる遠
 けりもよき見ぬ結ひも成
 山輝のねりもさうらり鼻の光
 はくもさうらり大塔ノ宮
 雲のりもさうらり大塔ノ宮
 はくもさうらり大塔ノ宮

焼鳥の腐鐘の供養の山一皮雪
しつとさざりひの親の口のくま
く風ふ流子のくまは深千を
あま儀に半馬の片く合を
掃除の日月額の目れみくま
唐紙のくまは半輪、秋
うつくし九負くくまはる葉の念
堰くくまはる葉胡蝶の卵

日當りくくまはる葉の巢雪
くまはる葉のくまはる葉
青きく踏んくくまはる葉
海川よ鏡のくくまはる葉
くまはる葉の千里の雪

歌仙

初難しきもあてて何ゆ
いしるも端をさしそのこ具以
つのおんぬまのうら津子不
きよき左友のたまわら濠
三日月の暈をくく落る海の面
冬はふもくくくもの他く松

作者不
知

春來

室戸

故一

沾耕

栢筵

くわくく薬研の碁の碁娘 故一
能非の代(美)とさうし 羊何
品度(山)一 是(ま)れ(雨)戸(今)く 栢造
碁(虫)形(く)く(行)さ(ま)り 妻
修(り)者(の)十(筋)半(の)穂(て)貫(ふ) 室戸
う(け)碁(ま)く(く)角(力)取(持)ふ 栢造
ほ(く)ふ(細)さ(う)り(が)碁(の)目 羊何
銅(戸)一 穂(い)小(屋)布(一)の(富) 故一

泥(又)て海(め)し始(て)お(ま)り 沾耕
碁(造)り(ま)ま(り)一 常(實)り(ま)て 室戸
碁(の)碁(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り 故一
く(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り 羊何
花(ふ)る(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り 栢造
五(か)よ(ら)る(ま)り(ま)り(ま)り(ま)り 沾耕

歌仙

三三へ向家ま掃つじさへん太 我兄
 一樹の後の蟬ふらふ春來
 洗濯の帆あき波よこすし 陶巾
 窓の〜直切ぬれつゝの透 了因
 袖か猫と町のゆり月くましく 兼伴
 ち〜と西瓜の〜の網のよ 蛸石

中世

中世

毛織く酒と拭きぬく寸
流るく八軒屋のま
ま御しつる時雨の
浄瑠璃世帯しまる土
朝方の箱根の海と持
控はるるもの
おまじふ磨ける月の
くまの巻く一
件
名
中
因
中
件
中
因

山住の年中着も年々
意匠出くつて人
とあつた親の教の
砕けく廣れ毎日の
花の砕く三ヶ九葉
根のくつる社
件
名
中
因
中
件
中
因

歌仙

今いくく給馬たまとと雨あめ時とき雨あめ和わ仲なつ
佐文山

中なかつのの女め身みのの醫い者しやははよよのの心こころ
春末

舟ふねのの口くち角かくがが穴あなははししのの心こころ
晋馬

ままのの心こころのの小こ足あしははめめのの心こころ
和山

飯いひももふふかかららくく月つきのの心こころはは酒さけのの心こころ
律車

肩かたのの心こころはは藤ふじのの心こころはは枝えだ
存義

古今和歌集
卷之九

竹の簾の錦のわらわす
こころのなまじり声も丸籠
三馬の照のりもたぬさ
の馬の宿のしるし
やまのりもなまじり
おしくもおしよふし
かきしる馬のりの中も
寒かへり日つ鶴のり
馬 山 車 馬 馬 馬 馬

つくりくくくくくくく
奢る平家の花火さの中
とくおきくくくくく
鶴の砂の掃くも
ききききききききき
活動の駕もきききき
くくくくくくくくく
百一升のくくくく
車 山 車 馬 山 車 馬

徒紙か風ちのくねて尻と寸馬
養ひの君の浮く不機極義
吉田のく瓶うつしくか海堤
と草まと徒るくく又飯山
まりののふおりくひ鞠骨ま
此由う真もくくふ節の墓馬
梅引ふ月かまの張庚
りの人かくく秋れは牙車

草狩のまれかひくお扶箱山
傘く知る出くくの町ま
鈴くくくく鈴金の古傳子馬
しらくくくくあのはくくく鳴義
保みぶくく花小音及の保まの車
まの光か鈴皮かくく山

教仙

白獅

美らなる藤の葉もわ井まの上
 花のまらま町もけらら 春來
 きかこ飯さるくおま圃く 幸之
 明高う蓋へまあくのもる 百字
 松皮昔観の本日月む 存義
 まさきとけける鎌もわし 我山

戰場をさるる交捨の福じしるま
よの唐よりしるる識のし
観音のわらわの目しるる山
四つはくしるる鳴くしるる端之
毎日のわらわしるる山
驚ふ他をしるる是代の人
法舟をしるるしるる般経
福をしるるの南無をしるる

無常く回轉も月のわらわしるる
たの宮しるるしるる宵の初年
枇杷をしるるゆわを前より豆查山
風掃くしるる入来り船
舟人の目しるるしるる三
けしるるしるるしるる
三人の太い樵おしるる山
別書しるるしるる村の騷動

津垣へ破船の荷物くらゝせくま
難所なる色い湯あふりあを
鑿口の酒もよひつむあまの月之
か例行し〜草市り露と
あふる〜〜〜
頃あを〜疎を岡山う公
和泉と傳〜の駕の意り
急行〜〜〜

雨風りけ〜門を修葺前
志あを〜物を後う北条
まか後も少れ〜の如
岩と海〜〜地の朝乾
笑〜地の林下〜見せ〜赤き
ゆき〜所も高野の川〜

和泉

歌仙

果はらふ佛の道小落葉の卯
 鐘のくく掃く晨の霜 春來
 狩麩の布子と付く笑の已 竹尻
 かりいとい知つく陶と振る 故一
 くれの目やと日庵の尋まぬ 林山
 軍鶴の目ふわつとさ疎きり 執筆

珪琳

長崎の守りては海を可なりとて
かきりては雨を可なりとて
故より火おきての所を所
に條の床にれして借す山
鞠の音りてのふれを思ひ
験者まれば目のおほき
播磨の襖をくもつおれ
ぬきをすくと曾根の松風瓦

おのづかぬは雲の借す
脚立をまきくは
そよほよそよほ
そよほそよほ
蝶照りては
ゆるりゆるり
ゆるりゆるり
ゆるりゆるり
ゆるりゆるり

歌僊

熊坂の羅刀嬉に霜衣の卯

左藏

らの 吼る 狼の 口 春来

由の 鯉の 喰ふ 鮎の 舟を 左十

竹の しの かの 縁を 啖む 曉雨

多敷の 船の 切る 月の 又丸一 故一

月を くら する 鷹の 追く 其齋

奇僊

けりしわづら月見る細工人
 声の満ちたる一寸のびり
 行くみよ秋の三葉を引捨る
 朝日夕月お森中る八棟
 居眠る初漢の才を息あしん
 ちりり待し今来を炊

宋阿
 春来
 大湊
 荻村
 雁宕
 存義

踏洲 我確かゝる道しうの 定
いつゝもいしゝくはる當の旅 義
赤もどしは履かひのしる糸糸履 来
と白つゝあつてもお怒んと啼 村
積丸の顔とくも糸糸彩色と 浜
お糸糸のしる糸糸の君と糸糸履 定
冬つ月あつりゝる糸糸糸糸糸 村
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸 浜

う
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸 義
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸 来
南糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸 村
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸 義
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸 定
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸 浜



